

平和の使者派遣事業に参加して

師勝中学校 三年 清水 翔子

私は、今回の平和の使者派遣事業でとても貴重な体験をさせていただきました。今まで戦争や原爆について学校の授業で習った程度の知識しか持っていなかった私は、今回の式典への参加で今まで知らなかったことをたくさん知ることができ、原爆ドームや平和記念資料館でも多くのことを学ぶことができました。

中でも、衝撃的だったのが、平和記念資料館の展示でした。原爆が投下される前と後の広島市の街のジオラマや、投下された八時十五分で止まった時計、焼け焦げた服など、様々なものが展示してありました。ジオラマでは、街がどれほどまでに破壊されてしまったとかがよくわかり、写真でみたときよりもずっと原爆の被害の大きさを知ることができました。ジオラマの街のあたり一面が焼け野原で、建物ほとんどなくとてもひどい状態でした。見渡す限り、木も建物もないなんて、私には全然想像が付きません。今の広島市の街はともきれいなっていて、昔この場所に焼け野原だったなんてとても信じられません。でも確かに私が歩いた広島市の街の上を、六十四年前のあの日原爆によって皮膚が焼けただれてしまった人たちが歩いていたのです。そのときの様子は、とても悲惨だったと思います。それを考えるともう二度と原子爆弾を使つてはいけないし、使わせる世の中にしてはいけないと思いました。

今から六十四年前の八月六日午前八時十五分。人々の日常は一瞬にして奪われました。そのとき人々は普段どおりに朝食を食べたり、勤務先へ向かったりしていたと思います。その日の午後八時十四分までは普通に生活していたのです。私は広島から帰ってきた後、家族と今回の体験の話をしました。母は、「そのときに朝ごはんを食べていたら、こんなふうにはスプーンを持ったまま死んでしまったんだろうね。」と言っていました。何が起こったのかわからないまま、命を落としていった人がたくさんいたと思います。空襲を警戒していても恐ろしいのに、いきなり爆弾が落ちてきたと考えたら、とても怖くなりました。そして今の世の中がいかに平和なのかということがわかりました。

でも、世の中が平和なわけではありません。核兵器を保有している国はたくさんありますし、核実験を何回も行っている国もあります。太平洋戦争が終わった後でも、世界のどこかで戦争は続いています。このようなことがない平和な世の中にするために、私たちにできることは何でしょうか。式典の中の平和の誓いでこども代表の二人は、私たちでもできる小さな一歩を教えてくださいました。まず原爆や戦争、世界の国々や歴史について学ぶことです。しっかりと真実を知ること、他の人にも伝えていくことができます。これから、世界中が平和になるために、自分たちにできる小さな一歩を実践していきたいと思いました。

今回、平和の使者として貴重な体験をさせていただき、とても感謝しています。本当にありがとうございます。

戦争と真剣に向き合って

西春中学校 三年 安藤 賢司

八月六日八時十五分広島に原爆が投下されました。上空で目もくらむような閃光を放ってさく裂し、一瞬で周りの建物が跡形もなく壊され、爆風や熱線で多くの人々が亡くなりました。資料館で見えてきて、とてもショックを受けました。こんなことが起こるなんて、今の世の中では考えられないと思います。また、被爆してもなんとか生き残った人々は、皮膚がボロ布のように垂れ下がり血だらけになりながら街をさまよったそうです。

ところで僕は、今現在の核兵器の威力を知り愕然としました。今の核兵器は、広島で落とされた原爆の約三千三百倍の威力があるとのことでした。僕はこれを知ったとき人間が怖くなりました。人間は、原爆を日本に二回落とし、さらに核実験で地球を限りなく汚染してきました。人間は、いったい何を考えているんだと憤りを覚えます。

僕は、改めて、なぜ戦争が起こるのかを考えてみました。僕は最初「話し合いで解決しないから戦争が起きるんだ」と思っていました。しかし、今回の広島市平和記念式典に参加してそれは違うのだと思います。確かに戦争は話し合いで解決しないから起こったという事実はあるでしょうが、その前に根本的な原因があると思います。それは、私達「人間」だけが持つ他の生物にはない「知識」と「知恵」があってもそれにふさわしい「行動」が必ずしも取れていないのです。身勝手な判断のもとでは当然話し合いなんてできるわけがありません。僕は人間がまわりを見ず行動するようになったのは、だんだん人間が変わってしまったからだと思います。人間は、「知識」と「知恵」をどんどん手に入れていくにつれて、ますます強欲になり、まわりを見ず行動したのです。だから、ついに広島と長崎に落とされた人類絶滅兵器「原爆」を生み出してしまったのだと思います。人間がまわりを見ようとせず、自分のことしか考えなかった結果だと思います。

今、世界各地で紛争やテロなどで何も罪のない人々の命が毎日のように奪われています。テレビでも報道されていますが、それが他人事になってはいけません。また、自分の国だけがひどいことをされてきたと思っているかもしれないませんが、僕たちの国も他の国の人々にひどいことをしてしまった事実を決して忘れず、しっかり伝えなければなりません。

今回の体験を通じて、「平和」についてとても強く考えさせられました。僕は、平和へ進む道は、絶対にあると思います。その道を進むためには、まず僕たちが変わることが先決です。それぞれ自分自身が戦争という人間の過ちをきちんと未来の子どもたちに伝えること。そして、まわりを見て、今の自分には何ができるかを考える行動することです。頭でわかってても、体が動かなくては意味がありません。一人一人が一歩足を踏み出せば変わることができると今僕は心に強く思っています。

原爆がなくなるまで

白木中学校 三年 山田 真実

今、多くの被爆者がガンなどで苦しんでいます。原爆は多くの人を殺したり、苦しめたりしている恐ろしい兵器です。だからこそ、欲しがる人もいます。

原爆を持っている人と持っていない人がいました。持っている人は自分の身を守るため、自分の利益のため、原爆を楯に取り、持っていない人を従わせました。持っていない人は原爆が怖いので、持っている人に従いました。そして、持っていない人が原爆が怖くて仕方なくなったり、持っていない人は、持っている人になりしました。二人は仲良くなれませんでした。原爆は人のちよつとした欲からできたんだと思います。強い兵器があれば…という願いから。人は簡単に殺される。殺されることが怖くて、刃物や銃より、相手が持つ武器より、強い武器が欲しくなりました。そして、原爆ができました。使ってみると、ものすごい力をもっていたので、この人は驚きました。だから、思いました。これで自分の身は安全だし、相手が手を出してくることもない。私は平和を手に入れた。この人は知りませんでした。相手が不安や恐怖を感じていることを。この人はわかりませんでした。被爆者がどれほどつらい思いをして、生きているのか。この人のちよつとした欲はとてつもなく大きくなり、もう核を手放すことができませんでした。この人も原爆の被害を受けた立派な被爆者だと思います。

原爆は悪いことをしか起こしません。悲しい思いやつらい思い。そして原爆を投下した人たちを恨んだり。そういつた悪いことをなくすには、心から変えていかないとけません。原爆は人の弱さです。それに立ち向かうことができれば、私たちは今より幸せになれると思います。しかし、原爆を廃絶するためには、持っている人の心も変えなければいけません。原爆を作り、投下して、たくさんの人が苦しんでいる姿を目にしても、まだ原爆を手放そうとしてくれません。そんな人たちの心を変えられるのは原爆を体験した人たちだけだと思います。その人たちの話や絵、それらを聞き、目にすれば、必ず手放してくれると思います。

原爆は、まだ世界中にたくさんあります。ですが、私は原爆が全てなくなることを信じています。原爆を作ったのは、私たちと同じ人間だから。私たちは原爆の恐ろしさを学び、廃絶を訴え続けなければいけません。持っている人の心が変わるまで。

今回、私が広島に行ったときに、原爆の子の像というのを見ました。それは原爆で亡くなった子供たちのためのもので、その一人に佐々木貞子さんがいます。貞子さんは十二歳のときに白血病で入院し、鶴を折りはじめました。千羽折れば病気が治ると信じて。そして、千羽を越えたところで貞子さんは亡くなりました。貞子さんは生きたかった。貞子さんだけでなく、原爆で亡くなった人たち、病气やけがと闘っている人たち、生きたかったし、生きていきたいんだらうと思います。この人たちのために私ができることはほとんどありません。だからせめて忘れないように、たくさんの人に話をしていきたいです。何年経っても、この悲劇は忘れ去られないように。

戦争と今

訓原中学校 三年 北野 晴之

八月五日から六日にかけて、平和の使者として初めて広島へ行くことができました。この二日間は「戦争と平和」そして「今」を考えさせられる二日間となりました。

初日、僕たちは宮島にある厳島神社に行き、その後、平和記念公園に行きました。近くには原爆ドームがありました。原爆ドームは、建物の鉄骨がむき出しになり、原爆で飛んだ黒いススが付いており、それらは一瞬にして広島街の街を吹き飛ばし、焼き尽くしたすさまじい力とその力がもたらした人々の苦しみを物語っていました。

原爆ドームから少し歩いたところにある平和記念資料館には被爆前後の広島街の様子を再現した模型や原爆投下の諸外国の動きが年表とともに書いてあるボード・原爆の高温の熱で溶けて形が変わってしまったガラスなどが展示されていました。中でも一番印象に残ったのは、八時十五分を指したまま止まっている腕時計でした。その時間を指したまま、時計は止まって、壊れていたということとは、その腕時計を身につけていた人は……。考えたくないことや想像もしたくないようなことがここでは脳裏によぎります。その他、思わず目を覆ってしまいましたくなるものもありました。

そして翌日、僕たちは「広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式」に出席しました。

今年は梅雨明けが例年より遅く、梅雨明け数日後の式となりました。そんな中、内閣総理大臣や広島市長をはじめ、今年は過去最高となる五十九国の人々がこの式に参列しました。そしてこの時、八時十五分がきました。黙祷が始まり、僕は静かに目を閉じました。鐘の音が心の中に響き、鐘と鐘の間には、静寂が広がりました。六十四年前の今、鐘ではなく原爆が全てを焼き尽くし、戦争の中、一生懸命生きていた人々を戻れない闇の中へと連れ去ったのです。一九四五年八月六日八時十五分に止まった時計。二〇〇九年八月六日八時十五分、黙祷の中、一秒一秒カチカチと音と時刻を刻み続ける僕の時計。

つらくても苦しくても我慢や努力をして今の日本を築いた人々がいるから僕たちがいる。だから僕たちはその事実から目を背けず、原爆や戦争の悲惨さを伝えていかなければならないと思いました。

米国のオバマ大統領は今年の四月、プラハ演説で「核兵器を使用した唯一の核保有国として廃絶に向けて行動する道義的責任を負う」と言っていました。これは歴代大統領が成しえなかったことで、世界が核兵器廃絶に向け歴史的な一歩を踏み出しました。

この「平和の使者」は僕に多くのことを学ばせ、考えさせてくれました。これからの日本・世界を担う僕たち若者は、豊かで平和な世界を築いていく責任があると思います。そのためにも過去を知り、過ちを反省し繰り返し返さないという思いを強く持たなければと思います。

平和の使者派遣事業に参加して

熊野中学校 三年 西 真奈実

私は、八月五日と六日に平和の使者として平和記念式典に参加するために広島県に行ってきました。熊野中からは一人で行くので少し心細かったけれど他の学校の生徒とすぐに仲良くなれました。

八月五日に原爆ドームと平和記念資料館に行き、六日は広島市主催の原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式に参加させていただきました。私は広島に行くことが初めてだったので原爆ドームなども初めて見ました。

原爆ドームを見たときは、なぜかとても苦しく悲しくなりました。原爆ドームを見るだけで、原子爆弾がどれほどすごい威力を持っていたのかを思い知らされました。原爆ドームの隣にある川は、原子爆弾で大やけどをした人たちが、「暑い」「水が欲しい」と叫びながら飛び込んだ川だそうです。そのため、その川には、死体がたくさん浮かんでいたそうです。私はその光景を想像してみました。自分が体験しているみたいで怖くなりました。

原爆ドームを見たあと、平和記念資料館を見学しました。平和記念資料館の中には、現在の核兵器の状況や、被爆者の遺品、高熱で溶けた瓦等の被爆資料が紹介してありました。

私は、展示してある資料などをじっくり見ました。資料館などでこんなにしっかりと見学したのは初めてでした。

一番印象に残ったところは、被爆者の遺品が展示してあるところでした。紹介文を読むと、私の年齢に近い人や子供の遺品が多いことが分りました。どの遺品も本当に悲惨な状態で、ボロボロになった学生服や生徒手帳、靴がありました。おかずが炭になってしまったお弁当、髪の毛や指と爪などもありました。

戦争のときに自分と同じぐらいの子どもたちが原爆の被害にあっていたことを知り、自分がいかに幸せな毎日を過ごしているのかを実感しました。

次の日は、原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式に参加しました。

朝早くに行ったのですが、やはりとても混んでいました。歩いていると男の子からお供える花をもらいました。

そして八時から式典が始まりました。十五分には、全員で黙祷しました。この時間に原爆が落ちたと思うとゾッとして鳥肌が立ってしまいました。

子ども代表が言った、「平和の宣言」を聞いたとき、もう絶対に戦争を行ったり、核兵器を作ったり使ったりしてはいけなと思います。そして現在戦争を行っている国や地域の指導者たちに広島を訪れてもらい、戦争が多くの人々を傷つけ、子どもたちの未来を奪ってしまうことを分ってほしいと思いました。

わたしは、この二日間でいろいろなことを学びました。それらを学校の友達や先生に伝えて、戦争や核兵器の恐ろしさを知ってもらうとともに、平和な社会を実現するために自分ができることを考えていきたいと思っています。

平和の使者として

天神中学校 三年 加藤 勇弥

昭和二十年八月六日午前八時十五分、空から大きな爆弾が、広島に落ちました。その瞬間に大きな爆風が街を破壊し、多くの尊い命を奪いました。

八月五日、広島駅に降り立ちました。僕は平和の使者として、そして、当時の人たちの思いを知ろうと、しっかりと広島を見てこようと思いました。今の広島からは、原爆を受けたときの様子は分りませんでした。戦火の跡もとどめている感じがしませんでした。しかし、広島平和記念資料館に行き、展示物を見ると、当時のことを思い知らされました。焼け焦げになった弁当箱、解けた一升瓶が原爆の恐ろしさを僕たちに訴えてきました。特に服が焼け焦げて、人間の原型がなくなってしまった展示物は衝撃的でした。とてもショックを受けました。展示物を見ながら、市役所の担当の方が原爆ドームの近くで語ってくれたことを思い出しました。

「原爆が落ちて、多くの人たちが必死で川に飛び込んだんだよ。ここは、火の海だったからね。」

展示物から。広島の花の海の様子が見え、想像できました。

「助けて」「熱い」

そんな叫びが聞こえてきそうでした。みんな必死に生きようと思ったんだ。しかし、その思いが通じなかったのだ。

本当の平和って何だろう。資料館の見学を終えたとき、「本当の平和とは、戦争が終わることではなく、核兵器がなくなると、世界中の人たちが笑顔で暮らせることだ。」と思いました。僕は、食べたり、飲んだり、寝たりするなど、あたりまえのことがあたりまえにできる今の生活をとてもありがたく思われました。

二日目、平和記念式典に参加するために、昨日と同じ場所、平和記念公園に行きました。前の日と違って、会場に多くの人がいました。そのなかには、外国人もたくさんいました。平和を思う気持ちほどの国の人も同じだと思いました。午前八時、平和記念式典が始まりました。午前八時十五分、原爆が投下されたときと同じ時間になりました。原爆で亡くなった方たちに黙とうを捧げました。「カーン、カーン」と鐘の音とともに会場は静かな空気に包み込まれました。式が終わる、千羽鶴を供えに行くと、そこには今にも羽ばたきそうなたくさんの千羽鶴がありました。平和を象徴しているかのようでした。

平和とは戦争をしないこと、そして核兵器を廃絶することです。今の僕に、平和のためにできることは何だろう。やれることが一つあります。多くの人たちに原爆の恐ろしさを伝えることです。まず、身近な級友に伝えることです。本当に平和を訪れることを僕は祈り続けます。